health care report
Soleil
2012 12 それいゆ
vol.156

株式会社 ヘルスケア経営研究所

イキ!イキ! 現場リポート

医療法人笠松会 有吉病院

〒823-0015 福岡県宮若市上有木397-1 TEL 0949-33-3020(代表) FAX 0949-33-1922
http://www.ariyoshi-hp.jp/

自宅ではない在宅への挑戦

北九州市と福岡市の間に位置する宮若市。緑豊かなこの地で、全国に先駆けて差額個室料を請求しない、介護療養病床の個室ユニット化を始めた有吉病院。あえて個室ユニット化を選択した経緯、そして、選択後の変化を取材しました。

院長 有吉 通泰先生

2つのユニットの中心にある掘りごたつ。家で言う居間の役割を果たしています。

2つの機能を併せ持った外来

周囲を山と田畑に囲まれた自然豊かな場所にある有吉病院の外来は、いつも子どもからお年寄りまで多くの患者であふれています。

病院は宮若市の端に位置し、周辺に診療所がないため、地域住民にとっては何か気になる症状があると『有吉病院へ』というように、かかりつけ医としての役割を果たしているためです。そこで、外来は364日(元旦以外)診療し、受付時間も18時30分までと仕事帰りでも間に合う時間に設定しています。また、一般内科だけでなく、循環器内科、小児科、眼科、整形外科、脳神経外科、泌尿器科、消化器内科、糖尿病、甲状腺と曜日は決められていますが、専門医が診療をしており、まさに、『かかりつけ病院+プチ総合病院』といった病院です。院長の有吉 通泰先生は「開設以来、念頭にあったことは地域密着型病院です。そのためには、小児から高齢者、そして最期の看取りまで患者に重宝される病院にしよう、また、地方であっても地域差なく、専門医の受診ができる病院にしようと、努力と工夫を重ねた結果が今のスタイルになりました。」と話します。

質の高いケア実践のための試行錯誤

病院の全スタッフの根底にいつもあるのは『自分が入院したい、あるいは自分の家族を入院させたい病院か』という問いかけです。この問いかけに応えるべく、10年前よりユニットケアを始め、今では入院ベッド146床（医療療養病床：56床・介護療養病床：90床）のうち、21床以外は全てユニットケアを行っています。

ユニットケアへの道のりは今から15年前に遡（さかのぼ）ります。まず、平成9年より、抑制防止に取り組み始め、そして翌年には福岡抑制廃止福岡宣言を県下10病院と行いました。ここから、ケアの質向上への取り組みはさらに加速します。

（この宣言をうけ、平成11年3月に厚生省令において身体拘束禁止が規定されました。）

抑制への対策を行い、次のステップとして取り組んだことは、排泄と食事でした。おむつ剥ぎや経管栄養チューブの抜去など、排泄・食事に関する問題行動の解消は、どうしても時間がかかるためです。そこで、栄養については、なるべく口から食してもらうため、季節感のある自然素材をできるだけ使用します。また、咀嚼能力に応じた食事への変更をする際も、硬さの違う食事を半分ずつ作り、患者に食べ比べをしてもらい、決定するなどの工夫を行いました。

排泄については、排尿パターンをチェックし、排尿誘導を積極的に行い『おむつゼロ（適切なおむつの使用）』を目指し、ベッドサイドにポータブルトイレを設置しました。「平成12年～13年当時はポータブルトイレでもいいから、離床させて、トイレに行かせることに必死になっていました。しかし、カーテン1枚で仕切られた中での排泄は、音、臭（にお）い、そして何より患者さんの自尊心を傷つける結果となってしまい、すぐに取りやめました。」と院長は話します。

この反省をもとに、翌年より、ユニットケアを行っていたグループホームを参考に改築し、全国に先駆けて介護療養病床における差額料なしの個室ユニットケアを始めました。

自宅ではない在宅

1ユニットをケアの効率、機能から考えて10床規模とし、介護士、看護師を固定配置しました。そしてユニットケアにより院長が考える『らしさのためのケア』が実現しました。1日の過ごし方は患者1人ひとり違い、そこには患者らしさが現れ、それまでの生活歴が現れます。手厚いケアを可能にする個別ケアですが、この個別とは単に1対1で接することだけではなく、患者の生活歴、その人らしさを知った上で初めて行えるケアです。その個別ケアを行うためには、患者が自分を出せる空間となる個室は最適でした。

レイアウトは患者の好きなように行えます。

イキ！イキ！ 現場リポート

病室は、患者の好きな家具を持込み、好きな小物を飾り、好きな音楽をかけ、患者が部屋にあるトイレに気にせず行ける。そして、家族の面会時間も夜9時までと、できるだけ、家族とゆっくり過ごしてもらう時間を設定できるのも個室だからです。院長はこの病室を「自宅ではない在宅」と位置付けます。

無料喫茶コーナー
子どもたちにはジュース、大人には院長こだわりのコーヒーと、患者や家族のホッと一息つけるスペースを無料ドリンクと一緒に提供しています。

個々の力が発揮されるケア

ユニットケアにし、病棟スタッフにも変化が現れました。ユニット化はコミュニケーション力を求められますが、深く付き合う分、『有吉病院の看護師さん』ではなく、『看護師の○○さん』と個を評価されるようになり、それが、誇りであり、病棟スタッフのやる気に繋がっていると話すのは、看護師の福本　京子ケア部長です。

また、地域密着型病院ならではのこともあります。それは、残された家族の様子を見にいく目的として、病院で看取った方の初盆参りに担当看護師らが伺うそうです。これは、患者・家族と病棟スタッフとの間に信頼関係がなければ実現しないことだと感じます。これを可能にするのも個室で慣れたスタッフと語らう時間があるからです。そして、患者宅で語られるほとんどが、手厚いケアへの感謝、病院だけれども満足いく看取りができたというスタッフへの感謝です。それが、看護師のやる気、そして、最期を看取る者として、どうあるべきなのかを考えるきっかけとなり、日々のケアにも活きてきます。

地域にあったキュアとケア

現在、地域包括ケアシステムなど、在宅療養可能なサービスの充実が図られています。しかし、院長は都市部中心に考えられる在宅サービスに警鐘を鳴らします。「都市部では、医療機関、介護サービス施設は多く、医療従事者も豊富にいます。また、患者宅同士の距離も近いでしょう。しかし、宮若市などの地方では医療従事者、医療機関ともに少なく、また、患者宅も離れており、なかには車で30分以上かかる場合もあります。このような環境の中で、病院にいるような要介護4・5の方を在宅で看ることは難しいのです。であれば、病院を自宅ではない在宅と捉えてもらえるよう、居心地のよいものへと変えて行く発想も地域にあってよいのではないでしょうか。」と話します。

最後に患者・家族の多くが職員に、自分自身が最期を迎える時が来たならば、有吉病院に入院したいと、伝えてくるそうです。この言葉こそが、院長をはじめスタッフが常に念頭においている『自分あるいは家族を入院させたい病院か』という問いかけへの1つの答えとなっているのではないでしょうか。

（原田　有理）